呪われたシルク・ロード

辺見じゅん

呪われたシルク・ロード

昭和五十年四月三十日初版発行
昭和五十年五月三十日再版発行

著者　辺見　じゅん
発行者　角川　源義

発行所　株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二丁目一三番三
〒一〇二　振替東京一九五二〇八
電話東京(二六八五)七一一一〈代表〉

印刷　旭印刷株式会社
製本　株式会社宮田製本所
落丁・乱丁本はお取替え致します
© Printed in Japan
0021-821024-0946(0)

＊

呪われたシルク・ロード――辺見じゅん

*

目次

序章　まぼろしのシルク・ロード――五

一章　〈民話〉をたずねて――一七
1　桑海のほそ道――一九
2　道了堂殺人事件――二九

二章　修羅の村――四五
1　江戸から来た花嫁――四七
2　石垣お大尽――五八
3　村の過去帳――六五
4　一枚の銅版画から――六九

三章　欲望の道――八一
1　狼と呼ばれた男――八三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

2　九十九里浜開田の夢――――一五
3　開港地横浜の風雲児――――一〇七
4　ある生糸密売人の盛衰――――一二五
5　「密売多くありて」――――一三〇
6　跳べない狼――――一三五

四章　聞き書き・機織り唄の青春――――一四一
1　〈市日市日の帳あらために――――一四三
2　〈玉梓やるから判じておくれ――――一五九
3　〈犬よ吠えるな泥棒じゃないよ――――一八〇
4　〈松竹万五郎さんは出雲の神よ――――一八六
5　機織り唄の聞けなかった村――――一九四
6　〈機織りバッタが人間ならば――――二〇七

五章　機織りとタブー――――二一七
1　古代のシルク・ロード――――二一九
2　機神さまの村――――二二三
3　「鶴女房」の世界――――二二八

4　ソロバンを酒の肴にした男――三三八

六章　現代野ざらし考――二四九

1　胎内回帰としての〈村〉――二五二

2　消えたシルク・ロード――二六二

3　日翳の館―関京子殺害事件――二七二

4　その日鍵水は雨だった――二七八

5　〈村〉と老刑事――二八七

6　近代日本のエロスとタブー――二九二

あとがき――三〇二

写真・北井一夫

装丁・門田ヒロ嗣

序章　まぼろしのシルク・ロード

私がはじめてその道に降りたとき、得体の知れない戦慄に襲われた。まるで、日陰の壺に落ちこんだような、湿った冥い谷の道であった。三方を山と雑木林にかこまれ、行手を木立の茂みがふさいでいる。

道の両側には建物があったが、曇天の空を背に鎮まり返っていた。音の聞こえない道である。

左手の雑木林に沿って曲ると、空屋が二軒並んでいた。雨戸のない硝子戸越しに、埃まみれのカーテンが半分垂れている。続いてもう一軒の家も、深い木立に埋もれ、どこが入り口なのかわからない。

そのとき、道に男が現れた。空の隙間からふいに舞い降りて来たかのような現れかただった。男は行きかけて立ち止まると、笑いかける。

一瞬、男のぶらさげていた思いがけないものが、私をうろたえさせた。それは、赤いスリッパであった。ビニールの爪先がぱくりと開き、中身のはみだしたスリッパである。まるで、内臓をつまみ出したような、妙に生々しい色をしていた。

思わず視線をそらしかけたとき、いつの間にか、数人の男たちがひたひたと夕闇を割って近づいて来た。男たちはそろって裸足だった。しかも、目の前の男と同じように、中身のはみでたスリッパをぶらさげ、無言で私をとり囲む。その間、数分にも満たなかっただろうに、私には息苦しいほど長い時間に感じられた。

男の一人が、なにかいいかけるように喉を鳴らしたとき、沈黙の道から声が聞こえた。ふりかえ

ると、あの建物から女たちがかたまって出て来た。女たちは白い袋を提げ、笑い声をあげると道の片側にある建物へと吸い込まれた。

いつの間にか、男たちの姿のないことに気づいた。夕闇のなかに吸い込まれでもしたかのように消えていた。

雨だった。けぶった小糠雨である。たちまち暗くなった谷の道を、追われるように私は国道十六号線へと走った。テール・ランプをつけた車が、国道を疾走していく。モーテルのネオンが路上に流れていた。

ふいに、国道沿いにあったガソリン・スタンドの女主人の声が聞こえた。

〈あんた、およしよ。あそこは、怖しい道だよ〉

その声は、どこまでもついてくる〈おんぶおばけ〉となって、私の背中へとはりついた。

私はある道を捜していた。

その道は、秘境と呼ばれる、山間僻地の山奥や峡谷にあるのでもなければ、まして異郷の地でもない。身近かにありながら、何故か忘れられた道であった。この道を捜すため、私は幾度か人に訊ねながらやって来た。最後に聞いたのが、国道沿いにあるガソリン・スタンドであった。今になって思うと、あのときの女主人の顔に走った、困惑とも薄笑いともつかぬ奇妙な表情が、そののち私を道の闇深い軌跡へと傾けさせたような気がしてならない。

私に、初めてその道のことを聞かしてくれたのは、昔話の語り手としてたまたま出会った一人の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

老女であった。

——あれは、数年前の夏の日のことだ。私は地図を片手に八王子の街中を歩いていた。日盛りの道を、どこでどう間違えたのか方角も定かでない路地奥に入り込んだ。ふいに機音(はたおと)が聞こえてきた。反復音を伴ったけたたましい音である。その音に誘われ、私はノコギリ屋根の工場へと歩いていった。

細長いコンクリートの作業場には、数台の機械が置かれ、老女が一人だけいた。

「うらが、はじめて機を織ったのは、十四のときだった。その時分にゃ、こんなうるせえ音じゃなかった。トンカラン、トンカランってな、今じゃ、なんだ機織りかって馬鹿にするが、うらの若(わけ)え頃は、みんな自分で織った着物を着たもんよ。機の織れんものは嫁のもらい手もなかった」

ガシャン、ガシャンとピッカーの杼(ひ)を打つ音が耳につんざく。

老女は機械を止めると、昔、唄ったという唄を聞かせてくれた。

くるかくるかと　機音やめて
筬(おさ)づか枕で　寝てまちる

長い年季を　一枚紙に
封じこまれた　そのつらさ

へしまい頃だよ　三つ星ゃどこよ
三つ星ゃ機屋の　屋根の上
ああ　ちゃんからん　ちゃんからん

老女の声は、くぐもるようにコンクリートの作業場に響いた。唄い終ると、はにかむように若やいで笑った。

「こんな唄、面白くもなかろうが、テレビの唄と違うもんな。それでも、うら、よう唄ったべ。唄でも唄わねと眠くて眠くて仕方なかったからよ。朝は一番鶏がなくと機にとりつき、夜は夜とて星明りをたよりに織ったもんよ。それに比べりゃ、今日はうんと楽だわな、黙っとっても機械が織ってくれる。結構な世の中になったもんよ。ここにおりさえすりゃ、誰にも文句いわれん」

私は老女に、もっと昔の話を聞かせてくれとせがんだ。

「んだな、むかしといえば、うらのおっかの娘のときにゃ、なんでも八王子はえらい蚕が盛んでよう、生糸をアメリカさんとやらへ運ぶんだって、絹の通る道があったんだと」

「絹の道?」

耳慣れない言葉に、私は聞き返した。

「んだ、絹の道だわな。なんでもおっかアの話じゃ、浜へ生糸を売りにいく商人のえらいおる村があってな、でけえ金儲けをしたそうだ。んにゃ、どこの村か忘れてしもた」

夏の陽が翳りはじめる頃、外から嫁さんが帰って来た。そのとたん、老女はくるりと背を向けた。

ふたたび機械の音がなり響いた。

〈絹の道〉が日本にもあった。老女のこの言葉は、私を驚かせた。あの、漢の都長安から、楼蘭を経て荒涼たる中央アジアの砂漠や高原を横切り、紀元前より東西文化の融合を果した古代のシルク・ロード。ラクダで往来した人々の冒険と欲望の果にあったものは何であったろうか。そして、日本のシルク・ロードとは、どんな道であったのか——。

〈絹の道〉とは古代の夢を再現するような、なんと雅(みやび)やかな言葉であろう。

それでいて、その頃の私は、老女の語ってくれた〈絹の道〉がどこにあるか捜す気持はなかった。地方に残る民話に心ひかれていた私は、単なる懐古談として忘れていた。

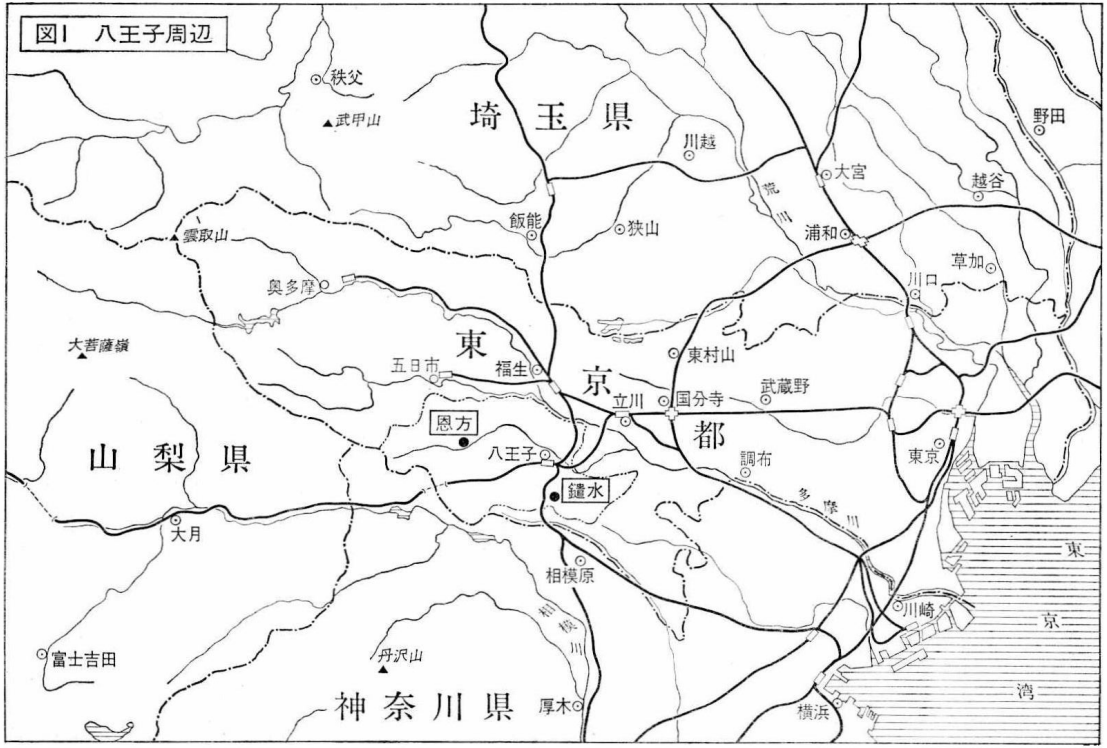
私が〈絹の道〉のことを思いだしたのは、それから二年も経ったときのことだった。

ところに根雪の残るこの村は、笹の群生が道を覆っていた。その夜、はなれ瞽女(ごぜ)（捷を破って瞽女組織からはずれた瞽女のこと）と呼ばれた老女から瞽女唄を聞いた。子別れの段ものと口説きである。

越後蒲原郡どす蒲原で
雨が三年、旱(ひでり)が四年
出入七年困窮となりて
しばた様へは御上納ができぬ
田地売ろかや子供売ろか
田地ゃ小作で手がつけられぬ
姉はじゃんかで金にはならぬ
妹売ろとて御相談きまる
……（中略）
五年五ヶ月五々二十五両で
長の年季を一枚紙に
封じとられたは口惜しはないが
……（後略）

ジンジンと声をはりあげ蟬のように鳴り響く瞽女唄を聞いた私は、その夜寝つかれずにいた。老女は、八歳にして失明し、口べらしのために長岡の瞽女親方の家に弟子入りをした。年季修業を終え、手引き女に連れられて門づけの旅に明け暮れた。なぜ、「はなれ瞽女」となったか、私は聞かなかったし、老女も語らなかった。

図1　八王子周辺


秩父
武甲山
埼玉県
川越
大宮
野田
越谷
荒川
浦和
飯能
狭山
雲取山
草加
川口
奥多摩
大菩薩嶺
東村山
五日市
福生
東京都
立川
国分寺
武蔵野
恩方
八王子
調布
東京
山梨県
鑓水
多摩川
大月
相模原
東京湾
川崎
相模川
富士吉田
丹沢山
神奈川県
厚木
横浜

老女の家を訪れたとき、赤土の崖下のトタン小屋には、村の人の捨てる襤褸が風に吹かれていた。養女にした手引き女は、同じ貧村の生れだという。知能の劣ったこの女は父親のちがう子を三人生み、白痴の子だけが一人残った。その子は空き罐を三味線の撥で叩いていた。小屋口いっぱいに夕日がさし込んでいた。

その夜寝つかれずにいた私は、ふいにあの八王子の老女の唄った機織り唄を思いだした。瞽女唄とも違う機織り唄が聞こえてきた。七・七・七・五の明るいが哀調のある調べが耳もとで鳴り響いた。一瞬、私はハッとした。歌詞の類似に胸をつかれた。

笹神村から帰るや、私はあの老女の電話番号を捜した。ところが、電話口に出て来たのは老女ではなかった。〈ばあちゃんはこの二月に亡くなりました。どんなお知りあいで〉と切り口上でいわれたあと、電話は切れてしまった。私は動揺した。まなざしの底に、貝となった老女の後姿が浮びあがった。真夏だというのに扇風機一つないコンクリートの作業場、音がうるさいから近所迷惑になるといって閉めきった窓、黙々と機械にむかっていた姿。光沢のある縦横の糸がみるみる平面を占めた布地になっていく。あのたて糸とよこ糸の絡みの彩の奥に、生糸商人を生んだというまぼろしの村や絹を運んだという道が顕ちあらわれて来る。

安政六年（一八五九）の横浜開港から明治初期にかけてのことである。日本の生糸が、世界の市場にむかって怒濤の勢いで出ていった。横浜は、生糸の吸出口であった。当時、日本の輸出品の約七割を茶とともに占めていた生糸が、馬の背や駕籠に積み込まれ、長野、山梨、群馬等から八王子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com